

ハリエット・ポッターと優しい世界

スターダスト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Helloハロー、この世界にご挨拶

——多くを失い、多くと出会う、そんな運命にある少女の話

目次

ハリエツト・ポッターと賢者の石

1 話 ハロー、聞こえますか 1

2 話 家族と、優しさ 8

3 話 魔法の横丁 16

ハリエット・ポッターと賢者の石
1話 ハロー、聞こえますか

—— ハリエット

—— それがお前の名前だよ

—— 生きて、愛おし、い、私の

記憶の彼方で誰かが泣きながら笑った。

目を開ける。

視界に映る天井は見慣れたもので、ヒビやシミの目立つ木目はこの孤児院の古さを物語っていた。

「…………… あれは、誰だろう」

未だ覚醒しない脳とはつきりしない視界に目を細めながら呟く。

口にしたのは、ここ数日見る夢についてだった。

それは、悲しい時もある。楽しい時もある。場面は違えど、いつも同じ声をするのだ。柔らかな女の人と、朗らかな男の人の声。彼ら

は、決まって私の名前を愛おしそうに呼ぶ。噛みしめるように呼ぶ。それに、私はいつも泣きたくなるのはなぜだろうか。愛に飢えているが故の羨望か、真偽も分からぬ記憶への懐古か。

どちらにしろ、私には関係ないことだ。幻想への憧れも、無くしてしまったものへの執着など、何の役にも立たない。

それは、私がまだ希望を胸に抱いていたときに思い知ったはずなのだ、きつと今日の昼ごろにはこの夢のことも忘れているに違いない。寝起きの倦怠感を振り払い、一つ大きな伸びをする。ようやく働き始めた脳は胃に空腹の信号を送っている。

トントントン

軽やかなノック音に私は小さく息を吐いた。よかった。

「はい」

「もう時間よ、下に早く来なさい」

「すぐ行耳きます」

短いやり取りの中の意図一つでも汲み取れなければここではやってけない。シスターの言葉には注意深く耳を傾けなければならず、精神が削られる。なんとも生きにくい社会である。

階段を降り、厨房のドアを開けてその奥の食材庫に向かう。今日の朝食は何にしようか。ああそろそろケビンの誕生日のはずだからあの子の好きなものを入れてあげるのもいいかもしれない。

そんなことを考えながらも手は休まず、着々と準備を進めていく。やがておよそ20人分の朝食を作り終え、それぞれが個別に取っつけていけるよう長机にセッティングする。やることが終わると途端に暇になってしまったが、シスターが一番最初に食べるのがルールである。本でも持って来ればよかったかもしれない。

「ハリー。今日は貴女にお客様よ。きちんと身だしなみを整えておきなさい」

「はいシスター」

朝から機嫌が良かったのはこれのことか、と密かに納得した。

引き取りの話だといいが、そう上手く事が進むはずがない。この孤児院に捨てられてから10年間、養子の話が出てくることは何度かあったがどれも直前に破棄になってしまっている。おかげでこの最年長になつてしまったため、今更引き取るなどの話があがることはそうない。厄介払いをしたくて仕方ないシスターたちのことだ、用意される服も普段なら絶対着させてもらえない上等なものだろう。

「——まさかここまでされるとは」

白のワンピースは、やはり予想通り普段着がボロ布に見えるくらいには綺麗で、形も流行りのものなのだろう、フリルが所々に付随しており肌触りも柔らかい。ここまでは大方予想通りであったのだが、まさか髪のセツトまでされるとは思わなかった。

赤のくせつ毛は丁寧に編みこみされていて見ていて複雑だ。鏡を覗く翠の目が、不思議そうにまんまるく見開いている。

「上流階級の人なのかな」

そうでなければこんなめかしこんだりはしないだろう。今までの養子縁組の話でもこんな格好をしたことがない。

——コンコン

控えめな音を合図に息を一つ吸い、鏡の翠を見つめ返した。

困惑した様子のシスターの後を首を傾げながらもついて行くと、通された部屋にいた人物に、私はなるほど、と思った。

「こんにちは、ハリエツト」

朗らかに笑う目の前の老人は、サンタクローズもビツクリな髭を生やしており、時代錯誤も甚だしい紫のローブを床に引きずっている。

確かに見た目は怪しいが、眼鏡の奥に光るキラキラしたブルーの瞳が、私には海にも星にも見えた。まるでなんでも見透かしてしまいうな瞳だが、暖かい色をしている。

冷え切った色しかないここでは、それは何より綺麗に見えたのだ。

「こんにちは」

「こんにちは。随分立派に育ったようじゃの、ハリエツト」

この老人はどうやら私を知ってるらしい。

それにしたって、懐かしく思える声音である。ハリエツトと呼ぶ声は、最近よく見る夢と似ても似つかないが、それに近い何かを感じた。

「ハリエツト・ポッター、です。…貴方は？」

「おおいかんの、老人にもなると順序を忘れてしまう。わしはアルバス・パーシバル・ウルフリック・ブライアン・ダンブルドア。ホグワーツ魔法魔術学校の校長をしておる」

名前が長すぎてよく頭に入ってこなかったが、なんとなく魅力的な単語が聞こえた気がする。

「今、なんて？魔法って聞こえた気が…いや気のせいか」

「気のせいではない、ハリエツト。君は立派な魔女の卵じゃよ。それも学べば偉大な魔女になること間違いない」

「そんな、何かの間違いだ。私が魔女だなんて、いつか夢で見た空飛ぶ車並みに馬鹿げてる」

ここのシスターはおかしなことが大嫌いだ。それはもう嫌いすぎて魔法なんて言葉が出た日には折檻が確定である。何よりも普通を重んじるシスターなのだ。

それなのに、私が魔女だなんて言ったらシスターは発狂してひっくり返ってしまうに違いない。

「嘘ではない。君は今までに周りで不思議なことが起きなかったか？」

「数えきれないほど。切られた髪が翌日には元通りの長さになってたり、さつきまで中庭を走ってたのに気付いたらガーゴイルの上にいたり」

「それら全部君に魔力がある証拠じゃよ。まだ子供で魔力の操作がうまく扱えない君は思いがけない場面で魔法を使ってしまうておるよ
うじゃがの」

先程から日常ではあり得ない会話ばかりしていて、これが夢か現実かわからなくなりそうだった。もしこれが白昼夢であつたら、私はシヨックで2、3日は寝込むことだろう。

「なら、…あー、ダブルドア、先生。私はその魔法を学ぶためにそのホグなんたらとやらに行くんですか？」

「その通りじゃ。それにホグワーツでは魔法を学ぶだけではない。君のご両親についてもたくさん知れることがあるじやろう」
「え…」

”両親”。それはなんとも言えない響きを持つ言葉だ。

そもそも、私はその両親に捨てられてこの孤児院にいる。物心つく前にシスターから教わったそれは、幼い頃の自分には大きな傷跡を残したが、今では縁遠く感じた。

「でも、私の両親は…」

「君は捨てられたと聞いておるようじゃが、君のご両親は君を捨てたわけじゃない」

なら、何故。何故10年間も迎えに来てくれないのだろうか。

そんな猜疑が、首を擡げる。

だけど、私はそれをどこか否定していた。

「しかし、君のご両親——ジエームズとリリーは、どちらももうこの世にはいない」

なんてことない、ただそれだけの話だっただけ。それ以下でも以上もない、そんなありきたりな話で、どこか分かっていた現実だった。

先程思い出された夢の声は、今でも愛おしげに私の名前を呼ぶ。宝物を呼ぶように。

「そう、ですか。…うん、なんとなく分かってました」

黙ってこちらを見つめるブルーの瞳は悲痛そうな色を滲ませ、まるで私の心情をすべて汲み取っているようだった。

「きつとこれは…どこにでもあることで、物語では、散々使い古された話なんだ」

先生に言っているのか自分に言い聞かせているのか。

今の私には、分からなかった。

「それでも、君は確かにジエームズとリリーの最愛の子じや。彼らの愛は、決してどこにでもある話ではない。ほんの少しの奇跡と、無償の愛情が、今の君を君たらしめている」

「どういうことですか？」

「彼らは、よく戦った。魔法界のため、そして——君のために。彼らほど勇敢な者もそういない」

抽象的な先生の話に少しだけじれったさを感じたけれど、それでも私は先を促した。

「そうじやのう。まずは君に、魔法界の話をしなければならん。それは、遠く昔のような話だが、いまだ魔法界に大きな爪痕を残している。冷酷で、残忍な——1人の闇の魔法使いによって」

それから先生はたくさんのことを私に話した。

闇の魔法使い——ヴォルデモートのこと。その魔法使いによって集められた死喰人。光と闇の戦い。両親の活躍。そして——両親の最期。

本当にたくさんのことを話した。途中、何度も悲しそうな目をして遠くを見つめた。

先生はとてますごそうな魔法使いに見えるけど、きつと多くを先生も失い、後悔があるのだろう。その混乱の時代を私は知らないが、話を聞くだけでも悲惨な時代だったのがうかがえる。実際はもつと残酷で非情だったに違いない。

でも何より私が耳を傾けた話は、両親の話だった。

「先生。私は、本当に愛されてましたか」

散々両親の話を聞いて分かっていった。分かっていたが、あまりにも唐突で実感が湧かない話だったのでつい、聞いてしまう。

どうか、覚めないで。

「もちろん」

この夢が永遠に続かなくたとしても、私はきつと永遠に覚えてるから。

「ジェームズとリリーは確かに」

いつまでも、忘れたくない。

「君を愛していたよ」

それが過去のものだったとしても、私は歓喜に涙してしまうのだ。

”確かに私は、愛されていたんだ”

2話

家族と、優しさ

小さなキャリーバッグに少ない荷物を詰めて、ハリエツトは一息ついた。

鼻歌を歌い、かつてないほどご機嫌な様子のハリエツト。

それも仕方ない、なにせ今日は彼女にとって最高の日だ。(ダンブルドアにはまだ早いと言われたが、よく分からなかった)

格好つけて言うのなら、終わりの日であり始まりの日でもあった。

7月31日、今日をもつてハリエツト・ポッターは10年間過ごした孤児院を離れ、新たな生活をスタートするのだ。

11歳の誕生日でもある今日に苦い思いしかなかったこの10年を振り返り、ハリエツトは新しい日々心躍らせていた。

ある人物と共に暮らすとダンブルドアから聞かされているが、果たしてその”ある人物”とは仲良くやっていけるのだろうか。

人見知りするタイプではないハリエツトは、初対面の人物との共同生活に抵抗はあまりないが、それでもやはり、新しいことや初めてのことに緊張する。

ハリエツトはほんのちよつとの不安と恐怖、それから心の大半を占める喜びと期待を感じながらも、あの日を思い返した。

「——その、魔法学校はとっても魅力的です。両親のことだって知りたい。けど、お金が…」

「なに、心配するでない。君のご両親は実に立派な魔法使いであった。君のためにと遺した物は想いだけではない」

子供であるハリエツトに、私財などあるわけがなく、学費を払えないことを懸念したが、ダンブルドアの返答にハリエツトは安堵の息をついた。

つまり、ハリエツトの両親は彼女に、ホグワーツに通う分の遺産を遺したということである。

「それからホグワーツは全寮制じゃ。ここから通うにはあまりにも気が遠い」

「全、寮制……」

なんと甘美な響きだろうか。

この息苦しい孤児院から少しでも離れられると思うだけで、舞い上がってしまうほどには。

そんなハリエツトの様子を感じとったのか否か、ダンブルドアは彼女の歡喜に水を差すように「しかし、」と言葉を続けた。

「君にはこの孤児院を出てもらう」

路頭に迷えと？

ハリエツトは突飛なダンブルドアに思わずそう悪態つきそうになつた。

「えっと、それはどういう……」

「簡単なことじゃよ、君にこの夏から”ある人物”と暮らしてもらいたい」

「ある人物？」

「それは明日のお楽しみじゃよ。入学準備もその人物と買いに行つてもらおうよう頼んである。孤児院のシスターと既に引き取り手続きは済ませてある」

ハリエツトは、随分急だな、と思った。そんなことならもっと早く知らせてほしかった。

頭に自らの少ない私物を描きながら、ハリエツトはダンブルドアの「明日の朝迎えに行く」という言葉に小さく頷いた。

澄み渡る青空、汗の滲む夏の暑さ。

なんとも陳腐な天気ではあるが、ハリエットにとって、とても素晴らしい天気だった。まさに、始まりにはぴったりの日である。

「さあ、ハリエット。準備はもうできておるかな？」

「はい！」

「元気がよくて何より。では行くとするかの」

朗らかな笑い声と共に差し出される腕を掴んで、キラキラ光るブルーを、空の青と重ねた。

バチン！という音だけを残して、老人と少女は姿を消した。

——バチン!!

大きな乾いた音と共に、ハリエットは瞼を開けた。

視界は揺れ、吐き気が込み上げてくるが、そんなことがどうでもよくなってしまふほどには、ハリエットは今日の前の景色に呆然とした。

「さっきまで、孤児院にいたのに……」

全く知らない場所だ。

そう、先程までハリエットはダンブルドアと孤児院にいたはずなのに、彼女の眼前には見知らぬ——近くの標識にグリモールド・プレイスと書いてあった——景色が広がっている。

「驚くのも無理はない。今のは姿現しという移動魔法じゃよ。ただしこの魔法には1つ欠点があつてな。ハリエット、気分はどうじゃ？」
「う、ちよつと目眩がするだけなので、大丈夫、です」

「上出来じゃ。これは初めてだと吐いてしまう者もいるからな」

そうならそうと始めから言つてほしい、とハリエットは思った。

驚きに気をとられていた分後から来る吐き気や目眩を抑えながら

も、ハリエツトはダンブルドアに疑問を投げかけた。

「でも、いきなりどうして……?」

「なに、君の新しい”家族”を紹介するだけじゃよ」

「どうやらここがハリエツトの新居地となるらしい。」

「では、行こうか」

ダンブルドアの掛け声の一瞬後、地響きのような音がハリエツトの耳に飛び込む。

ハリエツトは困惑を隠しきれずにあたふたし、ダンブルドアを見る。

しかし彼はハリエツトの戸惑いなど気にもせず、ただ一点を見つめていた。

やがて音が止むと、ハリエツトは本日二度目の不思議を目の当たりにする。

なんと、11番地と13番地の間に新たな”12番地”があるのだ。

まるで、先程まで認識できなかったものが見えるようになった感覚だ。

「マグルには見えないよう魔法がかかっておるんじやよ」

ハリエツトの驚きを見透かしたような言い方だった。

実際、彼女はなんでも顔に出してしまう性質なのでダンブルドアにも彼女の心情は手にとるようにわかったことだろう。

ダンブルドアの後をついて中に入ると、そこは不思議な魔法の世界が——広がってるわけではなかった。

ただ、魔法使いらしいと感じる薄暗さと黒の多さを感じる内装だった。

床も壁も天井も黒一色に塗られており、上から吊り下がるシャンデリアは等間隔に銀の煌めきを放っている。高級そうな深緑の絨毯が敷かれており、靴の裏から柔らかな感触が伝わった。

少しの不気味さと新居への興奮で心臓は大きく鼓動した。

「坊っちゃん！ダンブルドア様がいらっしやいました!!」

「ひよえ」

緊張でドキドキしていたハリエットの体を揺らすほどの大声が屋敷内に響いた。

心臓が飛び出るのではないかと思うほど、ハリエットは驚きで飛び上がった。

恐る恐るダンブルドアの前を覗くと、そこには不気味な小人がいた。

瞼を重々しそうに開けたような細い眼、大きな耳は垂れ下がり、皺だらけの明らかに健康ではない色をした肌をしている。おまけにその小さな身体を覆うのはボロボロの薄汚れた布だ。

(なんてみすぼらしい格好をしてるんだろう)

ハリエットはその小人を不気味に思うより哀れに思った。

「——こんにちは」

ハリエットに向けた柔らかい男性の声に、ハリエットは体を僅かにビクつかせた。

哀れな小人にばかり目がいつてその後ろの男性に気づかなかつたようだ。

「こ、こんにちは」

「そんな緊張しなくても取って食べはしないよ」

そんな子供騙しのような冗談を言つて男性は緩く微笑んだ。

(ずいぶん、…儂く笑う人だなあ…)

それがハリエットの、男性に対する第一印象だった。

紺碧の夜空を思わせる黒髪はサラサラとしており、銀色にも見えるグレーブルーの瞳は優しそうに細められている。目鼻立ちは整っており、あどけなく見えた。

「僕はレギュラス・アークタルス・ブラック。これからは君の”家族”だ」

その言葉に言いようのない充足感を感じ、視界は歪んでいった。

それでも——

それでも、ハリエットは優しく笑んだ。

「ハリエット・ポッター、11歳。これから、よろしくお願いします」

——そうすれば、世界も優しくなってくれる気がしたから。

——哀れな子供だと、思った。

生まれて1年で両親を殺され、預けられたはずの親からは捨てられ、世界から隔離された。

いくら悪の手から逃れるためとはいえ、悲劇の連続に同情を禁じ得ない。

そんな悲劇の主人公も、ココでは英雄扱いされているのだから皮肉なものである。

彼らが死をもってして彼女を守ったのは必然だったのか偶然だったのか。

運命も因果も、結局は後付けの結果論でしかない。

彼らの死は果たして本当に防げなかったのだろうか、今になって思う。

もし、彼らが生き残っていたら。

きつと、闇の帝王は倒されることはなかっただろうし、ぬるま湯の

ような今の平穩も訪れることはなかったことだろう。

でも、それでも。たった一人の子供の幸せはあつただろうに。

そう思わずにはいられなかった。

母親そっくりなエメラルドグリーン瞳は少しの寂しさと、虚しさが映っていた。

無造作に伸ばされた赤毛は父親と同じようにクルクルとカールしている。

顔立ちは：母親似だろうか、でも、父親も思わせるような顔であつた。

そこかしこにある二人の面影に、涙がこみ上げてくる。

尊敬する優秀な魔法使いと魔女であつた二人は、付き合い始めからとても仲が良かった。

彼らに子供ができたと聞いた時はとても喜ばしかったが、当時は暗黒時代、表立って祝福することはついに叶わなかった。

おめでとうございます、きつと先輩たちに似た優秀な魔女になりますねって言つて。彼らがそうだろう、なんていつたつて僕らの子供だからね！と自慢げに言つて。

そんな、何の変哲もない会話をしたかつた。

また笑い合つて、先輩がお得意のイタズラで場を明るくして。暗くなつてちやなんもできやしない！って笑い飛ばす。

そんな”彼らとの”普通の平和が、どうしようもなく欲しかった。

数年学び舎を共にした僕と違い、あの子は僅かな思い出すら時間に奪われてしまった。

何も、ないのだ。

愛も、思い出も、家族も。

だから、どうしても知つてほしかった。

彼らがどんなに君を愛してたか、彼らとの短い思い出や、家族とはどんなものなのかも。

それが、僕が家族になることで君が知れるのなら、喜んで僕は彼――ダンブルドアの頼みを引き受けた。

「ではレギユラス。よろしく頼む」

「はい。ぐ心配なく」

彼のことはあまり好きではなかった。

何を考えているのか分からないのに、向こうはこちらを見透かしたようなところが。

すべて分かっているかのように振舞っているくせに、大切なものは零れ落ちたことにするとところが。

きつとこれも、これからも、あの子の運命は彼の掌の上の物語だ。

それでも、あの子の幸せがその——零れ落ちやすい——狭い掌の上にあるのなら。

僕はその掌に君がいることを望む。

どうか、どうか立ち止まらないでくれ。

先輩たちの死を無駄にしないためにも。

この世界のためにも。

きつと君に用意された道が最善だから。

その道に”僕”がいるのなら、

どうか、拒まないでくれ。

「今日から僕は君の家族だ」

——たとえ君が死んだとしても。

3話

魔法の横丁

ハリエツトがグリモールド・プレイスのブラック邸に越してきた翌日。

今日はダイアゴン横丁という場所で入学準備をするらしい。

確か入学許可証と同封されていたリストには聞いたこともない単語だらけで、ハリエツトはとても興奮したのを覚えている。

思い出すだけでいてもたってもいられず、朝からソワソワしっぱなしだ。

「おはよう、ハリー。落ち着かない様子だね」

「あ、おはよう。そうなんだよ、とても楽しみすぎて昨日はあまり眠れなかったんだ。魔女になるための準備だなんて、一昨日まで普通の女の子だったのに考えられないよ!」

寝癖もそのままにハリエツトは力強く言った。

レギュラスはピョコピョコとはねる赤毛を見てクスクス笑っていた。

「あそこはいつも人で溢れかえっているんだ。いろんな店があったた
くさん歩くだろうから朝ごはんはしっかり食べなよ」

「はい!」

「敬語」

「あ、うん!」

まだどうしても敬語が抜けきらないハリエツトだが、少しずつレギュラスにも慣れてきていた。

(最初は物静かな人っぽくなって思ってたけど、案外話しやすくってフレンドリーだ)

ハリエツトはレギュラスの親しみやすさに安堵していた。

「朝食の準備が整っております」

「いつも助かるよ、クリーチャー」

「あ、ありがとう!」

少し捻くれているが、——屋敷しもべ妖精というらしい——クリー

チャーにも大分慣れてきた。

かなりみすばらしくてアレな容姿だが、会話を試みれば主人想いで優秀な妖精であった。

レギュラスやハリエツトが感謝を述べれば、そっけない態度でも少し柔らかくなって照れているようだった。

(レギュラスもいい人だし、クリーチャーとだつてうまくやれそうだな。2人はもちろん、ダンブルドアにも感謝しなきゃ)

そう思いながら、ハリエツトは朝食のサラダにフォークを突き刺した。

「——それじゃあハリー。今からダイアゴン横丁へ行くわけだけど、姿現しは知ってるかい？」

朝食も食べ終わり、準備ができたところでレギュラスはハリエツトに尋ねた。

ハリエツトはダンブルドアとのあの不思議瞬間移動を思い出しながら引き攣った笑みで返した。

「い、一応は……」
「慣れないと気分悪くなるかもだけどごめんね、今他の手段は使えなくてね」

他にも移動手段があることに驚きだが、姿現しなんていうなんとも不便な移動手段を常に使う魔法使いのことだ、どうせ碌なものではない。

「大丈夫……だと思っけど不安だよ。でも、ダンブルドア先生には私、酔いに強い方だつて言われた」

「なら安心だ。じゃあ捕まつて」
何一つ安心要素はなかったが、ハリエツトは意を決してレギュラスの腕を強く掴んだ。

「ちゃんと捕まらないとバラけるから、気をつけてね」
なんと不穏な言葉を今言うのか。

ハリエツトは魔法使いはみんなはこうなのか！と心の中で叫び、パチン！という乾いた音を耳にした。

「さあ、目を開いてごらん」

レギュラスの柔らかい声と共に目を開けば、そこには不思議な光景が広がっていた。

「ダイアゴン横丁にようこそ」

「わあ…!!」

行き交う人々は皆古びたローブを纏い、中にはとんがり帽子を被っている人もいた。立ち並ぶ店は、ハリエツトにはそれが何に使われるのか想像もつかないような物ばかり並べられている。目に映る物すべてに目を奪われ、感嘆の声がこぼれた。

感動と興奮に言葉も出ないが、出てきたとしてもそれはどれも陳腐なものではないだろう。

とにかく、ハリエツトはその光景に心奪われたのだ。

「ふふ、分かるよ。僕も最初来たときは感動したからね」

「え、レギュラスも？」

彼は生粋の魔法使いの一族出身であり、幼い頃から魔法に触れていたと聞いたのだが、それでもやはりこの光景は幼子には魅力的に映るのだろうか。

「もちろん。父や母が魔法を使うのは散々見ていたけど、それでも最初はこの光景に目を輝かせた。ちょうど今の君みたいにね」

ハリエツトは自身の興奮を見透かされ、少し恥ずかしげに笑った。

「さ、まずはお金をおろそう。君の両親の金庫の鍵はダブルドアから預かってるからね」

「銀行があるの？」

「もちろん。銀行といえばグリーンゴッツだ」

どうやら魔法界にはマグルの世界と違って銀行は一つしかないらしい。

レギュラスの言うグリーンゴッツは、小さな店の立ち並ぶ中、ひときわ高くそびえる真つ白な建物だった。磨き上げられたブロンズの扉の両脇には真紅と金色の制服を着て立っている——クリーチャーとは別物の——小人がいた。

「あれは小鬼^{ゴブリン}って言うんだ」

小さな声でレギュラスが言った。

ハリエットは興味深そうに小鬼を眺めた。ハリエットよりも頭一つ分小さく、賢そうな顔つきで、手の指と足の先が長い。

なんと長いんだろう、とハリエットが見つめていると、小鬼と目が合ってしまった、慌てて視線を逸らした。

逸らした先には何か言葉が刻まれていた。

——見知らぬ者よ　　入るがよい

——欲のむくいを　　知るがよい

——奪うばかりで　　稼がぬものは

——やがてはつけを　　払うべし

——おのれのものに　　あらざる宝

——わが床下に　　求める者よ

——盗人よ　　気をつけよ

——宝のほかに　　潜むものあり

「ここから盗もうとする魔法使いなんていないんだ」
なんともぞつとする言葉だった。

「あれ、ハグリッドじゃないですか」

急に立ち止まり、レギュラスは——小鬼と比べると余計大きく見えた——大男に話しかけた。

「おおレギュラス！夏休みに入って以来だな！どうだ、元気にやっているか、ん？」

「はは、ええまあ。そちらは？」

「いやなに、少しダンブルドア先生から頼まれごとをな。お前さんはどうした」

「この子の付き添いでして。ハリー、こちらはルビウス・ハグリッド。

ホグワーツで働いていて、森の番人なんだ」

「ハグリッドって呼んでおくれ。みんなそう呼ぶんだ」

「わかった。私はハリエット・ポッター。よろしくね」

「ハリエット？お前さん、あのハリエットか！」

急に鬼気迫る勢いで訊かれたハリエットは気圧されながらも頷いた。どのハリエットかは分からないけど、と付け加えて。

「随分大きくなったなあ！俺が初めて会ったときはボウトラックル並みだったってのに」

「なんて？」

そのボウなんとかやらは知らないが、この大男からすればハリエットの小さい頃など豆粒みたいだったのかもしれないと思った。

「いやあそれにしても、お前さん傷以外は両親によく似てる！赤毛と瞳はリリー、くせつ毛はジエームズにそっくりだ。いや、ジエームズの方が暴れてたな」

「それって髪のこと？」

「どっちもだ」

ハリエットは両親の顔など知らなかったが、似てると言われて嫌な気分ではなかった。傷のことは少し気にしてるのでそつとしいてほしかったが。

「そうだハグリッド、一緒にどうです？これから僕たちもあれに乗るんで」

「そりゃあいい。だが俺はどうもあれが好かん。お前さんに取ってきてほしいくらいだ」

「まあまあ。ダンブルドアの頼みなんですから」

レギュラスが窘めてハグリッドは渋々付いてきた。

しかしそれにしても、とハリエットは思う。

（“あれ”って何だろう？）

その答えはすぐに分かった。

「わー楽しい！楽しいねレギュラス！」

「よかったね。だけどあまり乗り出さないで。落ちてしまうよ」

クネクネ曲がる迷路をトロツコは凄いい勢いで走った。巨漢に遠心力は辛かったようで、ハグリッドは真っ青を通り越して真っ白な顔色で唸っていた。彼にはジェットコースターも無理だろうな、とハリエツトは密かに思った。

やがて小さな扉の前でトロツコはやつと止まり、ハグリッドは膝が震えたまま壁にもたれかかっていた。今にも吐きそうな顔色である。

それを気にもとめず小鬼——グリップフックというらしい——は扉の鍵を開けた。緑の煙が吹き出してきたが、それが消えると、ハリエツトはあつと息をのんだ。中には金貨の山があつたからだ。奥には高く積まれた銀貨や銅貨の山もあつた。

それらをレギュラスは杖一振りで集めていく。必要な額だけ鞆に詰め込んでからレギュラスは言った。

「全部君の両親が遺した物だ。金貨はガリオン、銀貨がシツクルで銅貨はクヌート。17シツクルが1ガリオン、1シツクルは29クヌートだから覚えといてね」

なんて微妙なんだろうとハリエツトは思った。姿現しといい、魔法使いは微妙に不便だと思う。

「次は713番金庫を頼む。ところでもうちーつとゆつくりは行けんのか？」

大分顔色が良くなってきたハグリッドがグリップフックに問うた。

しかし、グリップフックは無愛想にただ決まり文句のように淡々と言った。

「速度は一定となっております」

これは一定ではないんじゃないか。

ハリエツトはさらにスピードを増して急降下を続けるトロツコの中で愚痴をもらした。後ろのハグリッドなんか気絶寸前である。

地下渓谷の上を走るトロツコは、風だけではないだろうが、どんどん冷えびえとしてきた。

ようやくと着いた713番金庫の前で、ハグリッドは瀕死の状態だった。

「下がってください」

もったいぶるようにグリップフックが言い、長い指の一本でなでると、扉は溶けるように消え去った。

「グリーンゴッツの小鬼以外がこれをやりますと、扉に吸い込まれて中に閉じ込められてしまっています」

「中に誰か閉じ込められていないかどうか、調べたりはするの？」

「10年に一度ぐらいでございます」

グリップフックは意地悪げにニヤリと笑った。

「これだけ嚴重に警護されてるんだもの、中にはきつと特別なすごいものがあるに違いない。」

ハリエツトは期待して身を乗り出したが、すぐになんだ、とガツカリした。

空っぽと思えるほど何もない。あるのは茶色の紙でくるまれた薄汚れた小さな包みだけだ。

ハグリッドはそれを拾い上げ、コート奥深くに用心深くしまいこんだ。

ハリエツトはハグリッドがそんなに大切そうにしてるそれが、一体何なのか好奇心が湧いたが、聞くことはなかった。

「俺の用は終わった。さ、地獄のトロッコに行くぞ。帰りの道は話しかけないでくれよ。口を閉じてるのが俺にとってもお前さんらにとっても一番だ」

「そのようですね」

苦笑いでレギュラスが答えた。

また猛烈なトロッコを乗りこなした後、陽の光にパチクリしながら三人はグリーンゴッツの外に出た。

「なんだか数年ぶりに地上に出た気分だ、と思いながら、レギュラスの「さて、」と言う声に他2人は振り返る。

「買う物はたくさんあるし、ハグリッドもいるから二手に別れましょう。僕は火鍋などを揃えるのでハグリッドとハリーは先に制服を買ってきてください」

「わかった」

「選りすぐりの物を揃えるのでご心配なく。ああそれとハリー、普段着とかも買っておいで。これが必要な分だから」

レギュラスから服代と思われる額を受け取り、そこでハグリッドと共にレギュラスと別れた。

「制服ならここだな」

ハグリッドは「マダムマルキンの洋装店」の看板をあげてきた。「なあ、ハリー。」漏れ鍋「でちよつとだけ元気薬をひっかけてきてもいいか？グリンゴッツのトロッコにはもう散々だ」

”漏れ鍋”も”元気薬”もよく分からなかったが、すぐ戻るという声にハリエットは頷いた。青い顔をしていたので心配ではあったが、ハリエットはその”元気薬”とやらをひっかければ良くなるだろうと思いマダム・マルキンの店に1人で入っていった。

「お嬢ちゃん、ホグワーツかい？」

マダム・マルキンは、藤色づくめの服を着た、ずんぐりした、愛想のよい魔女だった。

「全部ここで揃いますよ…もう1人お若い方が丈を合わせているところよ」

店の奥の方では、青白くあごの上がった男の子が踏み台に立ち、もう1人の魔女が黒いローブをピンで留めていた。

「あの、普段着の方も頼みたいのですが…」

「まあまあ可愛らしいお嬢さんのお洋服を選べるなんて光栄ね。ささ、踏み台に立って。まずは制服から」

そう言つてマダム・マルキンはハリエットをもう一つの踏み台に立たせ、頭から長いローブを着せかけ、素早く丈を合わせてピンで留めはじめた。

「やあ、君もホグワーツかい？」

隣の男の子が声をかけてきた。

とがったあごを上に戻らし、見下すような目線で、ハリエットは少し居心地悪く感じた。

「うん。そうだよ」

それを感じさせないよう、つとめて落ち着いた声音で答えた。

「僕の父は隣で教科書を買ってるし、母はどこかその先で杖を見てる」
誰もそんなこと訊いてないと思いつながらハリエツトは適当に相槌をうった。

「これから2人を引っぱって競技用の箒を見に行くんだ。1年生が自分の箒を持つちやいけないなんて、理由が分からないね。父を脅して一本買わせてこつそり持ち込んでやる」

ハリエツトには、隣の男の子の言う箒なんて掃除用しか思い浮かばなかったが、競技と言うほどだから箒を使ったスポーツが魔法界にはあるのだろうと解釈した。

「君は自分の箒を持つてるのかい？」

「ううん」

「クイデイッチはやるの？」

「わかんない」

そのクイデイッチとやらが何なのかは分からないが、ハリエツトは一刻も早くこの場から立ち去りたかった。

「僕はやるよ。父は僕が代表選手に選ばれなかったらそれこそ犯罪だって言うんだ。僕もそう思うね。君はどの寮に入るかももう知ってるの？」

「ううん」

確か、レギュラスがスリザリンだったとは聞いている。

他にどんな寮があるのか知らないが。

「まあ、ほんとのところは行ってみないとわからないけど。だけど僕はスリザリンに決まってるよ。僕の家族はみんなそうだったんだから：ハッフルパフなんかに入られてみるよ、僕なら退学するな。そうだろう？」

「うーん」

ちつともましな答えもできないハリエツトだったが、男の子は気にしてないようだ。

「ほら、あの男を見てごらん！」

急に男の子は窓の方を顎でしゃくった。ハリエツトもそちらを見やると、ハグリッドが店の外に立っていた。どうやら具合も良くなっ

たらしい。ハリエツトの方を見てニツコリしながら手に持った二本の大きなアイスクリームをかかげて見せた。

「ハグリッドだ」

ハリエツトは男の子の知らないことを自分が知っている、と少しうれしくなった。先程からついていけない話題ばかりでうんざりしていたのだ。

「ホグワーツで働いているんだ」

「ああ、聞いたことがある。一種の召使だろ？」

「ハグリッドは森の番人だよ」

語尾を強めながらハリエツトは言った。

「そう、それだ。言うなれば野蛮人だつて聞いたよ……。学校の領地内のほつたて小屋に住んでいて、しょっちゅう酔っ払つて、魔法を使おうとして自分のベッドに火をつけるんだそうだ」

「彼は最高だと思ふよ」

「へえ？」

男の子は鼻先でせせら笑った。

「どうして君と一緒になの？君の両親は？」

「死んだよ」

「おや、ごめんなさい」

まったく謝っているような口振りではなかったが、ハリエツトはそれが気にならないほど気分がよくなかった。

こういった人種は孤児院にいたときのプライマリースクールにもいた。ズケズケと土足で踏み込んで人のことを言ってくる奴が、ハリエツトは大の苦手だった。

「でも、君の両親も僕らと同族なんだろう？」

「魔法使いと魔女だよ。そういう意味で聞いているんなら」

「他の連中は入学させるべきじゃないと思うよ。そう思わないかい？」

それからも男の子はしゃべり続けたが、ハリエツトは聞く価値もないと聞き流していた。

少しした後、——相変わらず男の子はしゃべり続けていたが——男

の子の方についていた魔女が「さあ、終わりましたよ、坊ちゃん」と言ってくれたのを幸いに、ハリエツトはこれ以上男の子の”くだらない話”を聞かずに済むことになった。

「じゃ、ホグワーツでまた会おう。たぶんね」

本当に気に入らない奴だと思いつながら、ハリエツトは返事をしなかった。

やがて普段着の採寸も終わり、マダム・マルキンの着せ替え人形になった後、代金を払い終わって店の外に出た。

ハグリッドにもらったアイスを食べて、その冷たさに少し気持ちを落ち着かせた。ナッツ入りのチョコレートとラズベリーアイスはとても美味しかった。

「そうだ、忘れるところだった。ほんのちよつと待っててくれ」「うん」

溶けるのを心配する暇もなく3口でアイスを食べ終えたハグリッドは、何かを思い出したように言った。

その入れ替わりのように人混みの中からレギュラスが戻ってきた。

「遅くなってごめん、偶然同僚に会ってしまつて」

「大丈夫。ちょうどハグリッドがどっか行つちやつたからよかつた」

「おや、そうだったんだ。まったく、ハグリッドはどこに行つたのかな？」

慌ててたようだから急ぎなんじゃないか、と適当にレギュラスと雑談を交えながら、ハリエツトはアイスを消費することにした。

「一口いるっ！」

「おや、いいのかい？じゃあお言葉に甘えて」

やや溶け始めているベリーのアイスをペロリと舐め、レギュラスは美味しいと笑つた。

——なんだか本当の親子みたいだ。

それを言うのはなんだかレギュラスを困らせるような気がして、ハリエツトはそんな思いを胸に留めるだけにした。

「ハリー！レギュラス！ちと遅くなつてすまん」

「ううん大丈夫。何してたの？」

「これを買に行ってたんだ」

ほれ、と大きな背中から出てきた——ハグリッドと比べて——小さな籠をハグリッドは手渡してきた。

不思議に思いながら中を覗くと、なんと雪のように白い梟が一羽凛々しく佇んでいた。

確か、ホグワーツでは梟や猫なんかのペットが許可されている。

ハリエツトはそのことを思い出した。

魔法使いの伝達方法が梟であることも。

「え、なんで、急に……」

「お前さんの誕生日だろうが。子供はおとなしく受け取っとけ」

「誕生日は昨日でしたが」

そんなことはわかってる、なんて豪快に笑うハグリッド。

ハリエツトは不安だった。

今まで祝ってもらうことがなく、嫌な思い出しかない誕生日に、急に家族ができ、こうして誕生日プレゼントを貰う。それはハリエツトにとつてとても大きなことだった。

抑えようのない興奮と、ムズムズした嬉しさがハリエツトの幸せを人生最高潮に攫っていき、しかしそれと同時に壊れてしまう不安と恐怖が湧く。

一度味わってしまったえば、もう戻れない。

それがわかってるからこそ、ハリエツトはいつかこの幸せが終わってしまおうんじゃないかと、恐る恐るハグリッドのプレゼントを受け取った。

「ありがとう、ハグリッド。でも、ほんとにいいの？」

「何度も言わすな。ハリー、誕生日おめでとう!!」

「、うん。ありがとう！」

「ハグリッドに先越されてしまいましたね」

「え？」

もったいぶるように笑ったレギュラスは、杖を軽くヒョイと振った。

パツと現れた小さな箱を、ハリエツトは戸惑いながら掌の上で恐る恐る受け取り、レギュラスに問うた。

「誕生日プレゼントですよ。これを受け取りに行ってたんだ」

上質なワインレットのリボンを解き箱を開けると、そこにはエメラルドグリーンルドグリーンの石がたくさん散りばめられていた金のバレツタだった。

「わあ……綺麗……」

「それはリリーがつけてた髪飾りじゃないか！」

ハグリッドの言葉に驚き、ハリエツトはレギュラスを見上げた。

「学生時代につけてたんだよ。あの日に壊れてしまつてね……この前から修理に出していたんだけど、誕生日に間に合わないとは思つてなかつたんだ」

「ああ、その髪飾りにはジエームズが魔法をかけてたからな。修復には時間がかかるんだろう」

「魔法？」

まだ姿現ししか知らないハリエツトからすれば、魔法はまだ慣れ親しむようなものではなく、ついハグリッドの言葉に反応してしまう。

懐かしむように笑うハグリッドは、ハリエツトを見て目尻に皺をつくる笑みで言つた。

「なあに。どこにでもある、愛の魔法さ」

——そして、その祝福がお前さんだ。

後に続いた言葉の意味を、ハリエツトはまだ知ることはない。